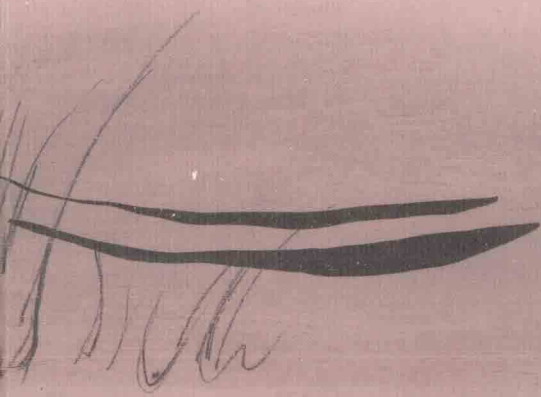


都に死す

進藤純孝



福武書店

都に死す

進藤純孝



進藤純孝（しんどう じゅんこう）
 一九二二年、東京に生まれる。東京大学倫理学科卒業。新潮社編集者を経て現日本大学教授。文芸評論家としても著名。著書に「戦後文学の旗手」「芥川龍之介」「川端康成 その人・その作品」などがある。

都に死す

一九八九年一〇月一日 第一刷印刷
 一九八九年一〇月一六日 第一刷発行

著者 進藤純孝

発行者 株式会社 福武總一郎

発行所 東京都千代田区九段南一三二二八
 〒100 電話(03)二三〇一―二三一
 振替口座(東京)六一〇五〇九七

印刷 大日本印刷

製本所 加藤製本

（落・乱丁本はお取替え致します）
 （定価はカバーに表示しております）

都に死す

ともすれば後悔の霧に閉ざされて、うつとうしさに身を漬けがちの過しよう。それにしてもどうしてまた、あんな文句が跳び出してしまったのか。

容態が急変したのでという、付添い看護婦からの電話を受けたのは、妻の美登里であった。ふだんから、母親に息子らしい情を寄せない雅郎の態度を理解しかね、折りに触れて「冷たい」と咎める彼女は、このときも別に慌てようとしないうちに苛立ち、折畳み傘を押し付けながら、「早く、早く」と促した。

経堂で乗った小田急の各駅停車を下北沢で急行に乗り換えたところを見ると、一分でも二分でもと、彼も急いてはいたわけだ。新宿駅でも、駆けこそしなかったが、のろのろ動くラッシュ時を過ぎた人混みを突き抜けるようにして、中央線の東京行ホームへ急いでいる。

四谷口の改札を出、見附の交差点を渡つて右に走ると、講談社フェーマス・スクールズのある祥平館ビルに隠れるように病院はある。最上階の五階でエレベーターを降り、病室への廊下を曲ると、角部屋の入口に立つて、付添い看護婦のずんぐりした軀が、手招く太い腕の動きもどかしげに、彼の動作の鈍さに焦れている。

駆け込むと、竹内医師と看護婦たちに取囲まれた小さな母が、もののしい器具に八方から吸付かれ、まるで息の根を止められかけている。

「にいさん、早く何か言つてあげて。早く、何か」

待ちかねていた妹由子の急ぎたてる声に、器具の林もわずらわしく、母の耳に口を寄せた彼は、「おかあさん、ありがとう」

と叫び、「聞こえてるのよ、わかったのよ、ほら」と、周りに相槌を求める由子に呼応でもするかのように、同じ文句を繰返した。

母の口許がわずかに動いたかと思えたが、声が届いたからとも思えなかった。「おかあさん、ありがとう」なぞと言つてしまった自身にうろたえながら、彼は他に文句を思案する暇もなく、ただ繰返すばかりだった。いつたい、いつまで連呼することになるだろうか。末期を看取る緊張にもかかわらず、はやうんざりしかけていた。

第一、発声の調子が気に入らなかつた。金切声ではない。が、それに近いうわづりよう。喉の尖だけで声を出している。いやな声だなとにがめるものの、声を止めれば取返しのかぬ事になるような怯えて、彼は母の耳に向つて吼えつづけた。

立派な耳だつた。長者の耳だつた。大きな屋敷のどまんなかで、一族郎党に取囲まれ、まさに巨星墜つかのように、息をひきとろうとしている人の耳だつた。駆けつけた息子と娘と、医者と看護

婦だけの、数名の気づかいの中に末期を託している寂しさには、およそ似合わぬ耳だった。

そのふくよかな白さは、雅郎の声を吸い取るどころか、傲然と撥ねつけ、

「おざなりはおよしよ」

と、嘲笑っていた。

長い時間のようだったが、「おかあさん、ありがとう」と繰返したのは、三度きり。

あれは酸素を送り込むものなのか、心臓の動きを計るものなのか、それとも脳波を記録するものなのか、ともかく動きの止まった電子音に変わると、竹内医師は待ちかねたように腕時計を見、二人の看護婦を促して、まるで蛸の足のように吸付いていた器具をすばやく取除き、

「十時三十二分でございました」

と、死の床に向って丁寧に頭を下げた。

看護婦たちもそれに習い、釣られて雅郎も妹もお辞儀を返し、何事も、案じられていたというよりは、待ちかねていたかのように片付けられると、しんと静けさが部屋の隅々にまで充ちた。

「とうとう、間に合いませんでしたねえ」

付添い看護婦が、病室を出たり入ったりしながら、気を揉んでいたのは、姉英子のことであつた。

彼女にすれば、由子にしても、雅郎にしても、実感としては、病人の身内ではない。四月二日の入院以来、三カ月近く、欠かさず毎日病室を訪れ、ぎりぎりの時間まで病人に付添い、優しく宥めたり、乱暴に叱ったりしていた英子こそが、ただ独りの肉親と映っていたのに違いない。

急変の報せも、だから第一に英子に向って訴えたのだが、その肝腎の人が死目に会えなかった。がっかりはしたものの、雅郎にも由子にも訴え甲斐はないと見てか、黙々と片づけにとりかかつて

いる。

英子が駆込んで来たのは、婦長が看護婦と共にあらためて病室に来、母の軀を淨めにかかる寸前。クリスチャンだった母には、経帷子の用意はないまでも、かねて英子が心づもりしていた母の死装束が間に合った。

聞けば英子は、その用意ばかりでなく、葬儀屋との連絡や、教会との打合せもすませて来たとか。死目に会えぬのは覚悟の上であつたらしい。

それというのも、胃腸病院と呼ばれるこの病院は、日比谷公園の近くにあつた時代から名の聞こえた病院で、昔は健康保険の効かぬほどの構えようだったそうだが、どういふ見識からか霊安室というものがない。

だから、病室を明けるその手で遺体を病院外に移さねばならず、車の手配も葬儀屋に急^きかす必要があつた。その上に、母の住んでいた三田東急アパートでは、お棺を運び込んだり運び出したりも厄介だし、他の住人にも迷惑がかかるので、葬儀の類はたいい外でいとなまれるという。

英子もそう承知していたから、母の属している聖アンデレ教会に直接運び込む手筈もとのえて来たらしい。あれこれ取仕切らねばならぬという緊張もあつてか、彼女は、母の遺体にしがみついて泣くというようなこともなかった。

そういえば、すべてひとりで取仕切る型の英子とは対照的な妹の由子も、竹内医師が、

「なにか、大きな出血が、あつたんだと思います」

そのために血圧が急激に下がり、取返す術もなかったんだと、死の告知のつもりで説明したとき、遺体にとりすぎることもなく、眼を潤ませながら頷いていた。

脾臓癌。八十三歳と十一カ月の生涯だったが、見送る英子が六十四歳、雅郎が六十三歳、由子が

六十一歳と、子供たちが六十代に轡を並べての別れであってみれば、取乱すという勢いももうないのだろうか。

雅郎にしても、酸素吸入のマスクや、いろんな計測器に、まるで襲いかかられているような光景にも、それが急を救うというよりも、じりじりしながら死の刹那を待ちうけているように見えても、憤りを覚えるどころか、「ああ、死ぬんだな」と、無気力に納得していた。

英子は、病室に引いてあった専用の外線電話で、大阪に出張中の夫のハーゲン・ガイスラーと連絡をとっている。由子は、死化粧を姉と二人でやりたいからと残り、雅郎は「しばらく外で」と、婦長に促されて廊下に出た。

エレベーターの乗降口に続くロビーで、彼は妻の美登里に電話し、通夜と明日の葬送式の時間と場所など、息子たちへの通知と、勤め先である大学への連絡を頼んだ。

ちょうど六月のこの日は、朝の十一時から特待生の証書授与式、午後三時から芸術学部の執行部会議があり、翌二十六日には学生たちをつれて湯河原に一泊でゼミナール・キャンプに出かけることになっていた。

母の息を引取ったのが十時三十二分。もう特待生たちの集まりも、そろそろ始まっている時刻。出席を待っていたりしたら困ると案じたが、妻は「研究室に電話しておいたから」と、いつもの手取り早さであった。

話しているうちに、彼女はもう涙声になり、なにひとつこみあげて来ぬ雅郎は、もっともらしげに声は落としてみたものの、調子が伴わず、
「じゃ、向うでな」

と、聖アンデレ教会の場所だけ、念を押して教えると、打切るように受話器を掛けた。

この期に及んでも、母を失った息子らしい素直な悲哀を示さぬ夫に、妻は不思議というよりも、無気味なものを感じ、不快さえ覚えたのに違いない。声が非難で曇った。

病室に戻ってみると、十日ほど前までは、

「下ろしてよ。どうして下ろしてくれないの。下ろしたって、あっちこっち走りまわるわけじゃないんだから。下ろしてくれた方がいいじゃないの」

と長女に文句を言いつづけ、次女に頼み込み、週に一度、それも一時間ほどしか顔を見せぬ息子の彼に、

「あんた、男の子でしょ」

と、睨むようにし、「早く、抱いて下ろしてよ」とせがんだベッド。個室にだけ残されているという木製の丈高いその旧式ベッドの上に、母は、やすらいでいた。

食事を一切受けつけず、もう点滴によつてしか栄養がとれないと見切つて、長女の英子が入院させることを決意したのは、四月の初め。それまでアネックスと呼ぶ別棟ながら同じ東急アパートに住む彼女は、なんとしても自分の手で看護しようと懸命だった。

が、わがままを叱るとか、宥めすかすというような程度では、とても食事をとらせることが出来ぬ状態が続いていた。それに激痛は間断なく、抑える薬も素人の手では与える術もない限界に来ていた。

英子からの連絡で、彼女に付いて雅郎が胃腸病院に竹内医師を訪ねたのは、三月の半ば。その日は土曜日で、午後から講談社フェーマス・スクールの四谷教室で話することになっていたから、病院が隣りというのは有難かった。

母や英子は、心臓血管研究所にレントゲンの主任として出向いて来る竹内医師とよく知ってお

り、十年の余も前からその心研の人間ドックを利用していた兩人には、なんでも気安く相談をもちかけられる医師のようであった。

「いつ入院されてもおかしくはない時機に來ています」

と、小柄で瘦型の竹内医師は、初老の穏やかさで、雅郎の問いかけに頷き、点滴に痛み止めを交え、激痛を避けながら栄養を補給していきましよう、と、相槌を求めた。静かなおとなしい言い方だが、生命を縮める作業への同意を求めているのだった。

英子が、それでも入院を半月も伸ばしたのは、そうした最後の手段に委ねる決断が、容易にできなかったからに違いない。

東五反田に住む由子を呼び、娘姉妹に左右から抱きかかえられながら、アパートの部屋を出る時、母は、

「ここには、もう帰って来れないかも知れないわね」

と、どちらにともなく、冗談めかして言ったという。

覚悟していたというよりは、まさかそんなことになりはすまいという気持で、むしろ娘たちを脅かす茶目であつたろう。痛とは気づいていなかったか。

入院してからも、努めて笑顔をみせようとした。個室の中に手洗いはあつたが、まだベッドから下りたり出来る間は、付添い看護婦が手洗いの中まで入って来るのを潔癖に拒むようだった。やつと支えられて歩いているのに、まるで盆踊りのような仕種で、

「あら、えっさっさ」

とおどけてみせたりした。

ひとりで始末しようとする無理で、あちこち擦剥き、立ち上がれずにいたところを、付添い看護

婦に救い出されたなぞという報告を雅郎が聞くあたりから、痛み止めの薬の量も、少しずつ増されたようである。

妻の美登里も、しきりと見舞いに行きたがったが、彼女自身、心房中隔欠損症で通院療養の身であり、見舞客に笑顔で勤めようとする老母の、子供のように小さくなってしまう哀しさなど見ると、わっと声を挙げて泣きだしそうで、最初の一、二度はともかく、次第につれては行きかねた。

「ちよろちよろちよ、ちよろちよろちよ」

聞きなれぬ掛け声で、眠っている母がいきなり首を左右にかしげて子供でもあやすような仕種をし、そのまま、また眠ってしまった、彼が英子と顔見合せ、

「なんの夢を見てるんだろう」

と、いとおしみを分け合った頃は、週に一、二度ながら、いつ行っても、こんこんと眠り続けた。

こうした昏睡状態の中で、あるときは「蝶よ花よと育てられた」小学校の時代を、あるときは華族学校と云われた東京女学館に独り上京して学んだ日のことを、あるいはまた三人の子をなしながら、喧嘩と泥酔と濫費に明け暮れる夫と別れる決断をした二十五歳の暮の日々を、あるいは子供を三人共に祖父母の許に奪い取られ、単身、東京に踏みとどまって、カフェの女給や料亭の女中などやりながら、口惜しさにのた打った暗鬱の時期を、そしてまた松竹に入り、女優早見照代として売り出した蒲田時代の活気を……「わたしは西暦と一緒に歩いているのよ」と得意げに笑う母だった百合子は、生まれた一九〇一年からの八十余年を、夢幻のうちに生きつ戻りつしながら、折々の喜怒哀楽を噛みしめているのだらうと、彼は母の顔を見つめていた。

昏睡の世界で、順序も脈絡もなく、八十年の時空を自在に飛翔しながら、混濁の意識を波立てて

繰返される喜びの刹那、悲しみの刹那は、親も、子供たちも知らぬ、奥深い謎を秘めて、浮遊しているのに違いない。

そんな時期から、覚めているときの百合子は、とげとげしく文句を言うようになった。寝たきりで下の世話も付添い看護婦の厄介になる様になった急激な衰えに合点がいかず、七、八歩で届く室内の手洗いに行きたがった。

ゴム管を挿入して採っているのだから排尿の心配なぞせずともいいと云い聞かせても、理解できないらしく、なぜ手洗いに行かせないのかと、理不尽を責める険しい目付きをした。入歯をはずしている故ばかりでなく、麻痺剤が口の動きを鈍らせて来たのか、たまにしか訪ねない雅郎には聞き取り難いことが多い。「なるほど」とか「そうか」とか頷きながら、姉にそれとなく説明を求める。「お花なんか貰ったって、少しも嬉しくなんかないのよ」

づけづけとこう言ったのは、ちょうど姉も妹も顔を合わせていたときで、五月十二日の日曜日に雅郎が用意し、三人の名で「母の日」の贈物として持ち込んだ花籠のことだとわかった。

まだあのときは、子どもたち三人からの贈物なぞという初めての出来事に、さも嬉しそうに笑ってみせ、仕合せだと云わんばかりに一人一人の顔を覗き込むゆとりはあった。

が、あれから一カ月経ったこの日は、

「そんなつまらないことをしてくるより、あたしをベッドから下ろしてちょうだいよ。下ろしたからって、そこらじゅうを駆けまわっていうんじゃないし、なにをぐずぐずしてんのよ」

と、同じことをとどまることなく繰返し、英子を困らせている。英子ばかりに当るのは、自分で育てた手応えが彼女だけに残っており、もう何十年も、こうして英子ひとりに文句を云いつづけて来た故だろう。

やっと英子をわが手に取り戻し、小学校、女学校と、まるで一人っ子のようにして育て上げ、この子だけはと手厳しくしつけて来たそのやり方は、口うるさく文句を並べ立てることだったらしい。

どう応えようもなく、文句の勢いに押されて、ただ困り果てていると、

「どうして黙ってるの。ふてくされていいいで、言いたいことがあったら、言ってごらんさい」と、またしても同じことの繰返しだったそうだ。

老いた母の、病氣故の小言と思つて、聞き流していても、

「あんた、わたしにどういふ怨みがあるっていうの。どうしてベッドから下ろしてくれないの。あなたの氣持なんか、ちゃんとわかっているんだから。虐められたから、敵打ちしようってんでしょ。いつだって、あんたは黙ってんだから。馬鹿にしてるんでしょ。おなかの中で笑ってるんでしょ。そのぐらいのことわかりますよ。早く下ろしてちょうだいよ。なにをぐずぐずしてるのよ。」

そう、いいわよ。あんたたち子供でぐるになって、意地悪しようってのね。それがいいことか悪いことか、もう分別できるでしょ。それで、わたしを下ろすか、下ろさないか、あんたたちの考えで決めればいいわよ。

下ろさないとなったら、それでもいいわよ。衛藤さん（付添い看護婦のこと）と二人で、孤独に暮すだけよ。ただそれだけのことよ」

と、とどまることなく続く文句にいつか釣られ、子供のときのよ様に、叱られでもしてる氣持に射竦められてしまうのだと、英子は苦笑する。

病室の扉をそつと開けると、昏睡状態に陥ってないときは、きまって母の不平の声が聞こえて来た。はつきりと発音できなくなってるから、聞き取り難いが、ベッドから下ろしてくれという例の

訴えである。

初めはベッドが苦痛なのかと思つたが、考えてみると、母はベッド生活の方が長い。畳の上の生活を埃っぽいからと嫌い、ベッドを好んだ。そんな母だからベッドそのものよりも、まるで宙釣りになつたままの姿勢で置かれているのが堪らないのに違いない。直に床の上に降ろされたら、自由がきき、手洗いにも勝手に行けると錯覚しているのだろう。

巻添えを喰つては叶わない。取合つてくれない姉に向けた矛先が彼の方に来ては、防ぎようはない。彼はそつとベッドの傍に腰かけ、母と眼が合うと、頷いてみせる。なんとも云えぬ優しい表情で受け止めていたのは、ついこの間までのこと。雅郎の眼を捉えようと、

「あんた、見舞いに來たんでしょ。どうして、なんにも言わないの」

と、百合子の眼は陰しく光る。大きな眼と高い鼻がことさらに目立つ。

「うん、ううむ」

と、苦しく去^いなしながら、彼はただ笑うほかはない。

「あんた、なにか隠してんのね。そうでしょ。だから、黙^いつてんのね」

なぞと喰いついて來られたら、どう逃げようか。

こんなにベッドから降りたがっているのだから、マットごと下ろしてみたらどうかと、姉に云つてみた。付添い看護婦の方が反対した。

点滴の針も、もう静脈の捉え所がなくなり、日々、どうしようかと閉口している。床ずれもひどくなり、尾骶骨がむき出しになつてゐる。下手なことをしたら、ますますひどいさまになるし、心臓も弱つてゐる。ちよつと軀の位置を変えることが、取返しのかね事態への引き金になりかねない。どう頼みに応えてさしあげても、次から次へと病人のわがままは出て來て切りはないもの、と

いうのが彼女の意見だった。

六月も半ばを過ぎたある日から、百合子の沈黙が始まった。あれほど

「ベッドから下ろしてちょうだい」

と、覚めていればのべつまくなし、しつこくせがんでいたのが、唇を巻き込むようにして口をつぐみ、もう何も言わなくなった。

ただじっと見つめているだけなのだ。姉は、

「何を怒ってるんだらう」

と気にし、妹も「ほんとにねえ」とくびを傾げている。雅郎はいよいよ末期なんだと、変化の来たことを覚った。

別に怒ってだんまりを続けているのではない。昏睡から覚めても、もうものを言う体力も氣力もなくなり、意識は無力のまま浮遊し、娘だとか息子だとかを識別できるだけで、それに向って働きかける気持は、すっかり欠落してしまったのだと思えた。

姉や妹が、拗ねて口をきかなくなったと解釈したのは、母がもうまともにものを考えたり、意志や意欲を抱いたりは出来ぬ、廃人同様の状態に陥っていることを認めたくなかったからに違いない。

雅郎には、拗ねたり、怒ったりの知能どころか、人や物を見分ける本能すら衰え、ただ生命だけを保っているに過ぎない母が見えていた。人間から動物へ、さらに植物へと退き、あとはもう物質に還るばかりの母が、黙ってベッドに横たわっていた。

そんな百合子が、なお「何を怒ってるんだらうね」と、娘たちを威怖させたのは、点滴で注入される栄養も受付けているかどうか知らぬ衰え様にもかかわらず、顔に痴呆が現れず、ある品格の